

「目の卒中」に24時間対応

回復に期待が持てるという。神戸市では市立医療センター中央市民病院（同市中央区）と隣接する市立神戸アイセンター病院（同）が連携を強化。全国的にも珍しい治療体制を築き、24時間対応に当てる。（小尾絵生）

脳の血管に障害が生じることを「脳卒中」というが、目の網膜につながる血管が詰まるケースは「網膜動脈閉塞症」と呼ばれる。発症すると視力が大きく低下しかねない疾病だが、診療科の垣根を越えて、脳卒中と同様の対応をすることで

網膜動脈閉塞症

網膜動脈閉塞症は、網膜につながる血管が詰まることで血流が途絶える疾患。光を感じする網膜の細胞が壊死して視力が失われたり、視野が欠けたりする。治療は急を要するが、基本的に痛みを伴わないため、受診が遅れることが多い。

人口10万人当たり年間2・5人が発症するとされるが、現段階で効果的な治療法はなく、視力が0・2以上に回復するのは2割以下という。

中央市民病院脳神経外科部長で脳卒中センター長の太田剛史医師（50）は「目の視神経も脳の中樞神経の一部。網膜動脈閉塞症についても脳卒中と同じように「目の卒中」と捉えてもいい」と説明。実際に、発症から1週間以内に患者の約3割が脳梗塞を起こすとされるため、目の症状だけでなく脳血管障害のリスクを調べる必要があるという。

同病院ではこれまで、脳

中央市民とアイセンター 神戸の2病院連携強化



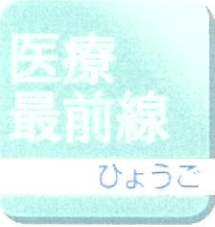
網膜動脈閉塞症に対応する新たな体制について説明する脳卒中センターの（左から）太田剛史医師、尾原信行医師、藤原悟医師＝神戸市中央区港島南町2、市立医療センター中央市民病院

卒中センターで網膜動脈閉塞症を発症した直後の患者を診療することはなかったが、2月からアイセンター病院と連携を強化。網膜動脈閉塞症の可能性がある患者を両病院で受け入れた場合、中央市民病院の救命救急センターで対応する。アイセンター病院の医師が網膜動脈閉塞症と診断すると、治療は脳卒中センターに引き継がれる。

こうした新たな取り組みにより、眼科領域だけでは対応できなかった治療法も選択肢に入るようになった。こうした新たな取り組みにより、眼科領域だけでは対応できなかった治療法も選択肢に入るようになった。

新体制下で初めて受け入れた患者は、突然右目が見えなくなった70代の男性。発症から3時間半後に脳梗

◇「医療最前線 ひょうご」は今回で終わります。来月からは新コーナー「生老病支 ひょうごの現場から」を第4月曜に掲載します。



中央市民病院とアイセンター病院は、市立医療センター中央市民病院と先端医療センター病院の眼科機能を集約して2017年にポートアイランドに開院。このため、中央市民病院の眼科救急医療を除く眼科の一般外来診療は現在、アイセンター病院に移行している。